

乙骨淑子の本

第2巻

八月の太陽を



理論社

乙骨淑子の本

第2巻

八月の太陽を

理論社



乙骨淑子の本第2巻

一九八五年十二月初版

一九八五年十二月第一刷

著者―乙骨淑子

おのこつよしこ

発行―株式会社理論社

東京都新宿区若松町一五―六

電話〇三(二〇三)五七九一(代表)

振替東京九一九五七三六

© 1985 Riron-sha Printed in Japan

落丁・乱丁本はお取替えいたします

乙骨淑子の本 第2巻 八月の太陽を

はじめに

世界地図をみていて、あなたはインドとはかなりへだたったところにある西インド諸島しよとうという名前の島をみつけて不思議ふしぎにおもったことはありませんか。アメリカ大陸をへだてて、西インド諸島は大西洋側に、インドは太平洋側にあるのですから。

これは、一四九二年、大西洋を西へ西へと航海しつづけたコロンブスが、やっとみつけた島を、インドとまちがえたことにはじまっています。だだっ広い大海のただ中を、小さな帆船ふねせんで先をきりひらいていったコロンブスの気持が、このけんとうはずれの名前をみていると、よみがえってきますね。

その西インド諸島の中に、日本の北海道よりも小さいハイチ島という島（今はドミニカ共和国とハイチ共和国）があります。コロンブスがみつけた頃には、「カリブ・インディアン」といわれた土着民が住み、海辺には平野がつらなり、土地はこえ、ゆたかな島でした。

しかし、コロンブスの発見したのち、スペイン領りやうになって約五十年で、土着民はまたたくまに死にたえたのです。スペイン人がどれいとして残虐ざんぎやくにあつかったためです。たった五十年のうちに死にた

えるということとは、いかにスペイン人のあつかいがひどかったかということ物語っていると思います。

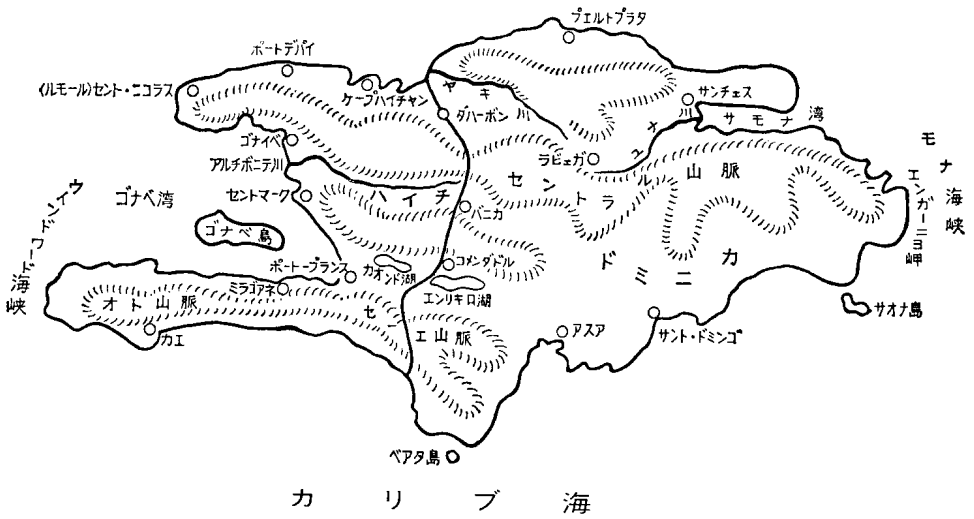
労働力をなくしたスペイン人は、その後アフリカから黒人を輸入し、土着民のかわりとしました。二百年のスペイン領有がつづいたのち、ハイチ島はフランス領となったのですが、アフリカからの黒人の輸入はたえませんでした。

一七九〇年には白人四万、混血人（黒人と白人の混血）六万、黒人がなんと五十万余りになり、島の人口の約六分の五を黒人がしめるにいたったのです。しかし、ひとにぎりの白人のためにこきつかわれる黒人のみじめな生活は、その後、いく年も、いく年もかわりなくつづきました。

コロンブスが発見した時とおなじように、ハイチ島には赤い花をつけた火炎木が風にそよいでいましたが、島の平和は全く失われていました。

この物語には、そうしたハイチ島をなんとか自分たちの島にとりもどそうとしてたかった、島の黒人たちの、一七九〇年から十二年間にわたる長い道のりがきざみこまれています……。

大 西 洋



はじめに……………3

第一部 くさりを断つ日

1 バユー農場の昼さがり……………10

2 オゼの逮捕……………13

3 さいごの言葉……………18

4 火をふく白人館……………22

5 バユーだんなの脱出……………27

6 プラシードとレオ……………34

7 混血人の裏ぎり……………38

8 スペイン領へ……………45

9 ビアソンの失敗……………51

10 スペイン領での訓練……………60

11 スペイン領への伝令……………64

12 この機をのがしてはならない……………72

13 黒い草原……………78

14 傷ついたクリストフ……………86

15 トウセン^{II}アルドー会談……………91

16 ウィンドワード海峡に敵艦が……………100

17 セント・ニコラス岬のたたかい……………104

18 海上にひらめく旗……………107

第二部 侵略者たち

1 サトウキビ畑で……………114

2 トウセンの願い……………125

3 あたらしい総督モイス……………131

4 レイモンドの言葉……………136

5 テュイルリー宮殿で……………142

6 イザックの手紙……………149

7 サモナ岬のフランス艦隊……………156

8 ナポレオンの手紙……………159

9 フランス艦上でのイザック……………164

10 トムソンとの別れ……………172

11 サモナ岬のたたかい……………176

12 ロシャンボーの申し入れ……………179

13 ダハーボンのイザック……………184

14 ふとつたフランス番兵……………190

15 フランス兵舎を脱出……………194

16 デリサンとともに……………201

第三部 八月の太陽を

1 あたらしいとりで	214
2 山をのぼってきた男	220
3 フランス軍の攻撃	226
4 ナポレオンのいらだち	233
5 トムソンの決意	236
6 フランス軍の倉庫へ	240
7 めぐりあい	251
8 休戦の申し入れ	258
9 サント・ドミンゴ会談	263
10 エンガーニョ岬で	268
11 バニカ陣地から	276
12 ジューの石牢	283
13 ラビエガの森のたたかい	286
14 八月の太陽を	291
おわりに	300

第一部 くさりを断つ日

1 バユー農場の昼さがり

ダッテン トンテン ダッテン トンテン……

太鼓の音が、バユー農場にひびきわたった。カリブ海からのしお風で、へしまがったサトウキビが、太鼓の音につれて、かりとられてゆく。まっこうから照りつける太陽。赤銅色の背中からながれでる汗。かりとられたサトウキビは、あつめられて小山になってゆく。

トンテン ダアー トッテン ダアー

休けいのあいずだ。ふうつと黒人たちは腰をのぼし、息をつく。足をふらつかせた老人をみて、ひとりの黒人がいった。

「ジムじい。休けいがすんだら、太鼓うちとかわるんだ」

「ありがてえ、トウセン」

ジムじいは汗をぬぐいながら、眼をほそめる。

ここはカリブ海のフランス植民地、ハイチ島。一七八九年七月一日、フランスのパリ市民が、国王や貴族・僧侶の国の治め方に反対し、政治犯をとじこめていたバステュー牢獄をうちやぶり、フランス革命の火ぶたをきったその日から、一年ちかかったハイチ島、バユー農場の昼さがり。空には雲ひ

とつない。かりとられて横だおしになったサトウキビの畑が、はてしなくつづいている。そこを、ひとりの子どもが、こちらへむかってやってくる。

「おい、トウセン、ありや、おまえのせがれじゃないか」

トウセンは、手をかざして子どもをみた。

「ブラシードだな。なにかあったか……」

トウセンは、小さくつぶやく。近づいた子どもは、肩でいきをしながら、父をみあげた。

「家にクリストフがまっているよ」

「クリストフが……」

「いってこいや。わしがかんとくと太鼓うちをしておいてやるよ」

ジムじいはトウセンの腕をゆさぶった。

「すまねえ。それじゃ、ひとつばしりいつてくるな」

トウセンは、自分の小屋にむかってかけだした。

「おい、坊主、食いな」

ジムじいは、サトウキビの茎をブラシードにさしだした。

「クリストフがむかえにきたとな……。なにか、かわったことがなけりやよいがな……」

ジムじいは、気がかりそうにトウセンのうしろ姿をみていたが、やがて太鼓にむかうと、いきおいよく打ちはじめた。

ダッテン トンテン ダッテン トンテン……

「ジムじいさん、打たせてくれよ」

ブラシードは、サトウキビの茎を左手にもち、右手に棒をとった。

「元氣よく打つんだぞ。ブラシード。もっと力を入れるんだ、もっと、もっと」

ドッテン トンテン ドッテン トンテン……

太鼓の音が、農場にひびきわたった。休んでいた黒人たちは、ふたたび仕事を始めた。

「よし、いいぞ。その調子だ。しっかりやれ」

ブラシードはジムじいの顔を見て、にかつとわらった。かりとった茎をつんだ荷車が、きしんだ音をたてて動きはじめた。砥石で道具をとぐ音。馬のいななき。あたりは、急にあわただしくなった。

*

クリストフは、小屋の外でトウセンをまっていた。彼は、トウセンの姿をみるなり、つかつかと近づいた。顔からあふれでる汗をぬぐいながら、彼はトウセンの耳もとでなにかをささやく。トウセンのあつい唇がひきしまる。そして、大きくうなずく。クリストフは話しおわると、すぐ立ちさっていった。なにが話しあわれたかは、わからない。しかし、ふたりのささやきあった言葉が、いつもつかわれていた。フランス語ではなく、アフリカ語であったことはたしかだ。トウセンは、クリストフのうしろ姿をみていたが、やがて砂けむりをたてて、農場へむかって、かけだした。

2 オゼの逮捕たいほ

月あかりが、ひとときわ高いマンゴーの木を照らしだしていた。その木の下に、二、三人の人かげがあった。ブブブーンと虫がとびたち、つづいて草むらをかきわける音がすると、人かげがあらわれた。人かげは小声でいう。

「クリストフ」

マンゴーの木の下の二、三人がうなずく。

「ジャン・フランセー」

「トウセン」

「ビアソン」

人かげは、とだえた。

「オゼはまだか？」

「弟のラウルもまだだ」

「おそいじゃないか……」

ビアソンが、いらだたしげにあたりをみまわす。

「小屋のほうかもしれない……いってみよう」

人かげは、さらに火炎木の枝をかきわけて山のおくへ。草むらの虫たちも羽音をたてながらついてくる。やがて、暗がりに一軒の小屋がみえはじめた。小屋は三メートルほどの柱の土台にささえられてつくられてある。柱の真中あたりに丸いこぶ。これは、すさまじい野ネズミをさけるためのものだ。このつくりは風とおしがよく、また、話し声が外にもれない。

小屋の前に、小さな人かげがある。

「またせたな、ブラシード」

「へいちゃらさ」

ブラシードは父のトウセンをみあげる。

「小屋の上には、もう、オゼとラウルがきているだろう」

「だれも、きていやあしないよ」

「えッ！」

トウセンは、はしごにかけた足をとめた。

「まだ来ていない？」

「そいつは、妙だ」

ビアソンは、あたりをみまわした。

「ここにも仕方ない。とにかく上へあがろう」